

2016年6月19日川越教会

人生を狂わせる心

加藤 享

【聖書】サムエル記上 18章5～16節

ダビデは、サウルが派遣するたびに出陣して勝利を収めた。サウルは彼を戦士の長に任命した。このことは、すべての兵士にも、サウルの家臣にも喜ばれた。皆が戻り、あのペリシテ人を討ったダビデも帰って来ると、イスラエルのあらゆる町から女たちが出て来て、太鼓を打ち、喜びの声をあげ、三絃琴を奏で、歌い踊りながらサウル王を迎えた。

女たちは樂を奏し、歌い交わした。「サウルは千を討ち／ダビデは万を討った。」サウルはこれを聞いて激怒し、悔しがって言った。「ダビデには万、わたしには千。あとは、王位を与えるだけか。」この日以来、サウルはダビデをねたみの目で見えるようになった。

次の日、神からの悪霊が激しくサウルに降り、家の中で彼をものに取りつかれた状態に陥れた。ダビデは傍らでいつものように豎琴を奏でていた。サウルは、槍を手にしてしたが、ダビデを壁に突き刺そうとして、その槍を振りかざした。ダビデは二度とも、身をかわした。

主はダビデと共におられ、サウルを離れ去られたので、サウルはダビデを恐れ、ダビデを遠ざけ、千人隊の長に任命した。ダビデは兵士の先頭に立って出陣し、また帰還した。主は彼と共におられ、彼はどの戦いにおいても勝利を収めた。サウルは、ダビデが勝利を収めるのを見て、彼を恐れた。イスラエルもユダも、すべての人がダビデを愛した。彼が出陣するにも帰還するにも彼らの先頭に立ったからである。

【序】沖繩命(ぬち)どう宝の日

6月23日(木)は**沖繩慰霊の日**です。先の太平洋戦争の末期、沖繩にアメリカの陸海空軍の大部隊が襲いかかり、日本軍との間に壮絶な地上戦が展開されました。逃げ場を失った大勢の市民が巻き込まれ、軍民併せて**約24万人の命**が失われました。そこで日本軍司令官が自決し組織的な地上戦の終結した**6月23日**を**沖繩慰霊の日**として守られるようになりました。日本バプテスト連盟では女性連合の提案で「**沖繩命(ぬち)どう宝の日**」として、平和のために**知り・祈り・共有する日**にしてきました。

2008年7月の女性連合の機関誌「世の光」に、沖繩バプテスト連盟女性会会長野原さんの「**沖繩・久米島の記憶より世界を考える**」という一文が載りました。野原さんは、沖繩本島から100キロ離れた小さな**久米島**の出身ですが、この小島で日本が無条件降伏した8月15日が過ぎても、**幾つかの家族が日本兵に虐殺された**のです。

[1] 久米島の惨劇

明勇さんは陸軍上等兵でしたが、6月初めに沖縄本島の戦闘で捕虜になり収容所へ入れられました。米軍が久米島を攻略する際に道案内人として連れて行かれた時に、久米島は無防備の島であることを説明したので、米軍は総攻撃を取り止めたそうです。明勇さんは米軍と一緒に久米島に上陸し、山の中に避難している住民たちに「米軍は住民に危害を与えないから、安心して家へ帰りなさい」と告げて回りました。すると8月18日に**米軍のスパイだ**として、残留していた日本兵たちから、**奥さんと1才の子供もろともに**虐殺されてしまいました。

8月20日に起った**谷川昇さん一家**の虐殺はもっと酷いものでした。先ず**彼**が首にロープをかけられ、数百メートルひきずられて息絶えました。**10才の長男**は、浜辺の小船に投げ込まれ、銃剣で刺し殺されました。**奥さん**は背負っていた乳児、抱いていた**2才の次男**をおろすように命じられ、後から首を切られました。泣き叫ぶ**乳児・幼児**も母親の死体の上に重ねられて、刺し殺されました。**7才の長女、5才の次女**は、隠れていた小屋から出てきたところを捕えられて、切り殺されました。夜の10時前後、月の光の下での惨劇でした。

戦争が終わったというのに、どうして日本兵はこのように、住民を殺したのでしょうか。下士官の軍曹がこう答えたそうです。「**我々の部隊は30名しかいない**。相手の住民は1万人もいる。彼らが米軍側についたら、我々はひとたまりもない。だから見せしめのためにやったのだ」

乳児、1才、2才、5才、7才、10才の子供たちを親もろともに銃剣で突き刺し、軍刀で切り捨てていくという**残虐な行為**を、兵隊たちは自分の郷里で、我が子たちにやれるでしょうか。ところが**戦場では**、我が身を守るために、次々とやれてしまう異常さ。それが**戦争の恐ろしさ**なのですね。

沖縄女性会会長の野原さんはこう語っています。「**戦争の恐ろしさ**とは、人間を**異常な行動へと駆り立てる**ことです。他者を憐れむ心、命を慈しむ思い等、神が与えてくださった**美しい心**が、存在する余地を与られません。国家や個人が自分の立場で正義を語り、**自分の命を死守するためには**、たとえ幼児の命を犠牲にする行為であれ、手段をいとわない。これが戦争によって変えられていく**人間の姿**ではないでしょうか。この久米島の惨劇は、神から離れることによって**全ての人間が陥る自己中心性**を、私たちに突きつける出来事だと思います。」

「私たち**うちなんちゅ**（沖縄人）が戦争を語る時、それは決して日本やアメリカへの恨みや憎しみから語るものではありません。ただ**憎しみと恐怖**の中で、人間は誰でもこのよ

うに恐ろしい**加害者**になり得るとい**危険性**を、沖縄戦を通して皆さんに認識していただきたいのです」「平和に思える日常生活の中でも、**自己中心的生き方**をするのなら、私たちの人生も、あの久米島の虐殺事件の延長線上にあると思うと、身が震えます。」
「事件を他人事として批判するだけで終らせず、**自分自身の中に住む罪の性質**に気づき、日々 主の前に畏れつつ、心を守っていただくことが大事なのではないかと思うのです」「平和は、政治によって実現するのではなく、**私たちの心の内に**先ず実現されなければならないと思います」

【2】沖縄を平和憲法のシンボルに

日本の女性連合会長が、野原さんの言葉に、こう答えていました。「**平和とは、幼子たちが温かいまなざしを受けて、安心して生きられる世界**、平和とは、すべての命を慈しめる世界、平和とは、他者の幸福を願える世界、平和とは、互いを喜び合い尊重できる世界、その世界の実現のために、神さまは私たちを召されたのではないのでしょうか。私たちはそのような**平和な世界を、何としても作り出さねばなりません。**」

私たち夫婦も、シンガポールに10年暮して、日本国内にいる人よりは戦争中の歴史の一端を、**アジアの視点**から、少しは広く知ることが出来ました。日本から遊びに来た**大学生**が、体験入学した地元で、生徒たちから戦争中の**日本軍の残虐行為**を聞かされて、泣いて帰って来ました。日本人がこの小さな美しい国で、4万人以上もの中国人を虐殺したこと知らされた**ショック**と、自分たちが日本で何も教えられずに、のん気に生きてきた**恥ずかしさ**に、気付かされたからでした。

私たちは先ず**知ることが大事**です。私も久米島の恐ろしい惨劇を知りませんでした。**沖縄について**、もっと知ろうとしなければならないと思いました。そして**祈ること**。そして**経験を共有し合い**、平和を一緒につくり上げていくことの大切さを知りました。

「沖縄県民の**自由・平等・人権・民主主義**を守ることが、**日本政府の責任**ではないか」という県知事の訴えに対する政府の回答は「**日本の国家安全保障は最優先**の課題だ」でした。そして憲法を改正してでも日米安保条約を軍事的に強化しようをしています。確かに南シナ海に人工島の基地を造ったり、日本の領海を軍艦に航海させたりと、**海域の領有権の拡大**を図る中国海軍の行動は、周辺各国の厳しい批難をかっています。しかし、だから日米の軍事同盟を強化しなければならないのでしょうか。

私たちの**憲法**はその前文で「日本国民は恒久平和を念願し、**平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して**、われらの**安全と生存**を保持しようと決意した」

と述べています。中国の**習近平主席**は昨年の中華人民共和国建国 70 周年の式典で、「中国は一貫して平和を愛しており、永遠に**覇権を唱えない**し、永遠に領土を拡張しない。中国は今後軍隊の人員を 30 万削減する」と言明しました。

それならば我が国も、**その信義に信頼して**、日米安保条約を日米平和条約に改正し、中国に一番近い島、全沖縄から基地を取り除き、**平和憲法のシンボル**として、世界に示すべきではないでしょうか。普天間基地の町**宜野湾市**の市長もこう言っています。「**備えあれば憂いあり、軍備が戦場を引き寄せる**。宜野湾は**普天間基地があるから危険**なのだ」本当にそうではないでしょうか。私たちは「**沖縄命(ぬち)どぅ宝の日**」を、全国民でしっかりと守っていかなければならないと思います。

【3】サウル王の初心

さて今朝は、聖書教育の学びでは、イスラエル王国の**初代の国王**になった**サウル**から妬まれた**ダビデの逃亡生活**になっていますが、少し後戻りしてサウル王がどのような人物であったかを、学んでおこうと示されました。

イスラエルの民は、どうして国王を与えて欲しいと強く願ったのでしょうか。先週山下先生が説明して下さいましたように、当時のイスラエルは**ペリシテの厳しい支配下**にあり、剣や槍などの武器を造らせないようにと、**鍛冶屋**が禁止されていました。それで鋤や鍬等の農具を作ることも研ぐことも、ペリシテに出向いて、してもらわなければなりません。そして町はペリシテの守備隊に監視されていました。だからペリシテとの戦争の時、剣と槍を持っていたのは、サウルとヨナタン親子だけだったと記されています。(13：22)

ところが**サウル**は、サムエルによって王に立てられると、軍隊を組織して勇敢にペリシテと戦い、勝利をはくしました。「サウルは**周りのすべての敵**、モアブ、アンモン人、エドム、ツォバの王たち、さらにペリシテ人と闘わねばならなかったが、**向かうところどこでも勝利を収めた**。」(14：47) ペリシテに比べれば粗末な装備の兵隊たちだったのに、次々と勝利を勝ち取っていったのですから、サウルは優れた**武将の資質**を持っていたのですね。イスラエルの全部族の中から、サウルを見出して王に任命した**サムエルの見識**に感心させられます。

サウルが王に選ばれていく様子は 9～10 章に記されています。サウルはサムエルから「あなたには全イスラエルの期待がかかっている人だ」と言われた時、「わたしは**最も小さい部族の中の最小の一族のもの**です。どんな理由でそのよ

うなことを言われるのですか」と言い返しています。(9:21) 全国民をまとめてリードしていくだけの**力の背景**がないからとても無理だと思ったのでしょうか。丁度議会の中で一番小さい政党から総理大臣が任命されたようなものです。どうやって大政党を相手に議会をまとめればよいのでしょうか。やはり政治では数が力です。**サウルの尻込み**は当然でした。

ところがサムエルは、**荷物の陰に隠れていたサウル**を皆の前に連れ出して言いました。「見るがいい。主に選ばれたこの人を。民のうちで**彼に及ぶ者はいない**」彼は誰よりも背が高く、ひと際目立つ頑丈な勇士に見えました。戦争の時には先頭に立って戦ってくれる頼もしい武将になってくれそうです。民はサムエルが太鼓判を押して推薦してくれたことと、サウルの**頼もしいルックス**に納得して、「王様万歳」と叫んで、歓迎したのでした。

しかしここで**大切**なのは、サムエルの推薦でもなければ、サウルのルックスでもありません。サウルが自分は王に相応しくないと尻込みした「**イスラエルで最小の一族の者**」という自覚です。**モーセ**の死ぬ前の別れの説教でも、こう語られています。「あなたたちは他のどの民よりも**貧弱であった**。ただ、あなたに対する**主の愛**のゆえに、——ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである」(申命記7:6~8) だから**神**は、ご自分の民の最初の王も、民の中の**一番小さな一族の者**をお選びになったのです。**神の選び**は、私たちとは逆ですね。でもよく考えてみると、これはとても**大切な信仰**ではないでしょうか。

【結】 悪霊に悩まされる王

ところがたくましい武将となったサウル王が、**悪霊に悩まされる**と表現される**精神錯乱**に襲われ始めたのです。その発端はペリシテ軍の大勇士ゴリアトを討ち取った**ダビデ**が、家来に加わり、頭角を現してきたからでした。今日の聖書の記述を読み返してみましよう。

ダビデは出陣する度に、目覚ましい働きをしました。人々は喜んで褒めたたえました。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。」サウルはこれを聞いて**激怒し**、悔しがって言った。「ダビデには万、わたしには千。あとは、王位を与えるだけか。」ダビデが国民から自分よりもはるかに評価されている。すると自分が占めている国王の地位も、やがてダビデに奪われてしまうのではないか。この**不安と恐れ**が、ダビデへの**妬み**となり、サウルの心を**錯乱し始めた**のです。

過剰な**ライバル意識**です。「両雄並び立たず」自分の地位を長く安定したものにするためには、自分にとって代わりそうな**強力なライバル**を早いうちに潰し

てしまえと言われます。キリストがベツレヘムに誕生した時も、ヘロデ王はベツレヘム一帯の2歳以下の男の子を皆殺してしまいました。でもこれはなんと悲しい現実でしょうか。

自分より優れた人が出て来たら、その人に大いに腕を振るってもらった方が、国や社会のためになります。喜んで彼を盛り立てるべきです。それがどうして出来ないのでしょうか。最初サウルは、自分は王に相応しくないと尻込みしました。それは「**イスラエルで最小の一族の者**」という自覚からでした。もしもサウルがこの**大切な自覚**をしっかりと持ち続けていたならば、ダビデが頭角を現してきても、嫉妬よりも喜びを持つことが出来たはずです。もともと自分は最も小さい者に過ぎないのですから。

「**初心忘るべからず**」とよく言われます。志した時の意気込みや謙虚さを常に失わないようにせよという格言です。英語：**Dont forget your first resolution(決意 決心)** 人生の苦難の意義を問う「ヨブ記」に、財産や我が子まで全てを失ったヨブの言葉があります。「**わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう**。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(1:21)

この様に**小さな自分**にも、神は仕事や任務を託してくださっていると受け取る人は、神から授かった自分の能力を最善に用い、感謝してその任務に当たります。仕事を他の人に回されても、神がその方が良いとお考えになってのことだからと、受けとめます。「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」です。失うまいとして悪あがきをしません。**平安な心を保つ**ことができます。サウルが失ってはならなかったのは、**この信仰**ではないでしょうか。

神を見失った心が、サウルに**初心を失わせ、人生を狂わせて**しまいました。この悲劇を、私たちはしっかりと受けとめなければなりません。

祈ります：神さま、6月23日は24万人余の死者を出した沖縄慰霊の日です。しかし沖縄は依然として米軍基地の島です。中国に一番近い全沖縄から基地をなくすことで、平和憲法のシンボルにしていくことこそが平和を確立していく道です。その決意を新たにさせてください。人を殺す心を私たちから取り除いてください。サウルは自分が小さな者の一人に過ぎないという自覚を抱いて王になりました。ところが自分より優れたダビデが現れると、王位を失うことを恐れ、彼を妬み、心の平安を失ってしまいました。小さい者、弱い者に目を注ぎ、祝福し、用いようとされるあなたの愛と慈しみを見失わないように私たちをお導き下さい。各自がそれぞれ与えられている賜物を感謝し、喜び合って、あなたの御用に当たる者にして下さい。主の御名によって祈ります。アーメン